

参入を決めてから営農を開始するまで

当初借り入れた農地(0.7ha)は、従業員所有の農地であったことから、地元との交渉をスムーズに運ぶことができた。生産した米は、矢崎総業会長により「栃の光」と命名し、矢崎グループのネットワークを通じて販売している。また、米の生産と併せて、野菜の作付品目決定のためのテスト栽培を行い、ジャガイモ、ニンニク等の根菜類や地元特産のカラナンパン(唐辛子)の生産を行うこととした。

営農については、代表取締役社長と食品リサイクル事業部の6名で対応し、県普及センターや近隣農家から営農技術の指導・助言を得ながら実施している。



食品リサイクルプラント

営農開始から現在まで

地元農業委員の協力の下、食品リサイクルプラント周辺の耕作放棄地を借受け、現在、借入農地は6.3haまで規模拡大している。

耕作放棄地は、地元業者に雑木・礫の除去、整地作業を依頼し、水はけ対策として暗きょ排水工事を実施した。

生産した大豆やジャガイモは、地元のあぶらあげ店、精肉店(コック原料)、地元量販店等に販売し、循環型社会の構築を進めている。

また、市主催の「栃尾食と農の連携プロジェクト」に近隣の下塩生産組合と合同で参加し、地産地消(栃尾産大豆によるあぶらあげ生産)の取組も進めている。

今後の農業経営の展開方向

今後、畑を中心に増反を図り、15ha程度まで規模拡大したいと考えている。経営の安定が見通せた段階で、食品リサイクル部門としての事業形態から、アグリライフ中越としての独立も視野に入れた事業展開を目指している。

また、冬期間は積雪により営農できないことから、有機質肥料の生産や米の出荷等に従事しているが、今後は、ハウスを活用した冬期野菜の生産や漬物加工等の6次産業化も検討している。



耕作放棄地再生後の農地(大豆の播種)

記載内容は平成23年6月時点の聞き取りによる